
*****ありがとう*****

璃來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとうございます

【Nコード】

N4432M

【作者名】

璃來

【あらすじ】

*

ありがとう

NO・1

バキィッ……！！！！

「ヴオエッ……！！ゲホッ……ゲホゲホ……！！」

「調子乗ってつと次は生かしておかねえ……。」

「璃來……行こうぜ。ポリさんい見られたらヤバいですし。（笑）」

「おお……。」

警察になんて何回捕まってるか知らねえけど
パクられるのはいい加減嫌だしえ〜。

今ボコツた奴等はチクラねえと思うけど……。

「璃來…………。」

祥弥の顔が引き吊っている。

そして、祥弥が指を差している方向を見ると、
鞆を抱えた女が立って居た。

……立って見ている。

ココは街外れにある廃墟地。

しかも立ち入り禁止区域だ。

この状況からすると、

俺らに付いて来て、

始めから今まで見ていたに違いない。

「アイツ絶対見てたっしょ…。どうすんの？」

祥弥の顔は引き吊り度がまっている。
どうする？って聞かれても…。

「……………わ…わかんねえ……………」

須藤璃来（16） T高校 1年F組18番

西條祥弥（16） T高校 1年F組17番

夏休み目前の7月……

俺らは人生最大の盲点にぶち当たった。

「…オイ…その女。俺ん家来い…。」

「え…。」

「てゆうか普通に面倒くさいんだけど…。」

20分位無言で歩いて俺の家に向かった。
誰も一言も話をしようとしなかった。

「祥弥…。その女俺の部屋まで連れてってやって。」

「おっけ……………」

俺はリビングにケータイの充電器を取りに行き、
2階にある俺の部屋に入ると、
正面に祥弥が座っていて、

女は俺らに見つかった時の格好のまま
部屋の隅にたっていた。

「そこ座れば??」

俺と祥弥が座っている反対側を指差した。

「あつ…あのありがとうございます…」

確実にビビってるよなあ…。

女は鞆を抱えたまま俯いていた。

「あの…殺さないで下さい……………」

少し驚いて祥弥と顔を見合わせた。

「あつ…イヤ、殺しはしねえけどさあ……………」（汗）

祥弥は若干引き気味だった。

「率直に聞くけどお前誰…??」

俺は少し顔を覗き込ながら聞いた。

……………つかコイツT高だろ…この制服…。

「えっあの、T高校1年F組12番の木城 優莉花」きしろゆりか」
15歳です。一応同じクラスなんですけど知らないですよね…。」

「同じクラス……?!12番って俺の斜め後ろで璃來の隣だろ

??！（驚）

「まじかよ…。尚更めんどい気がすんだけど…」

「つか何で俺らの喧嘩見てたの??」

「何でかは…その…いつ、言えないです…」（怯）

「何で言えない訳??何??疾しい事でも有る訳??」

「あの…その…あの…え…と…。」

女は答えられないまま泣いてしまった。

顔は見えないけど、

相当純粋な女なんだな…と思った。

「祥弥…お願いだから泣かせんなってば…。」

「わぁりい…。泣かせるつもりは無かったんだけどさぁ…っい。」

「はぁ…まあ、理由はともかく、

今回の事については誰にも言わないでくんねえ？

俺らも色々事情が有るんだわ??」

女の隣に行って特別大サービスで

頭をよしよし（笑）をしてやった。

女は落ち着いたのか、

顔を上げてこつちを見た為にバッチリ目が合った。

「ヤバッ…！！超ヤバッッッ…！！！！もうコツチ見んなッッ

ッ???(爆)

やべーやべーやべーやべーやべー!……!……!
本気でやべー!……!……!

「りっ…璃來?!…どうした?!」

「やばい……。」「

「どうした??…想像を絶するブスだったか??」(笑)

「ちげえーよ。想像を絶する可愛さ……。」「

ありがとう

NO.2

「ちげえーよ。想像を絶する可愛さ…。」

祥弥の居る位置から女の顔は見えない。

「はあゝ???目が腐ったかあゝ???んなわけねえ…ヤツバ!!!
えッ?!ちよつと待とう???!普通に可愛いよねえゝ???!
しかもまさかのスッピン???!」

「だからヤバいっつっただろ馬鹿が。誰の目が腐ったってゝ??」

「イヤあゝ誰だろゝゝ???」(汗)

「ふふっ…//」

女の笑い声い俺等は反応して、
同時に女を見た。

「面白い…。…………あつ…その…ごめんなさいっ。」

「イヤイヤヤツ!!!何でそこ謝んのツ!!!」

この女、天然ってよりも馬鹿ってのが勝ってんな。
しかも謝り上戸だし…。(汗)

「ねえ、彼氏とか居るのー？」

祥弥：何やってんだよ（汗）

お前彼女居るだろ。

さすがにキープするには勿体ねえし、

何か可哀想だろ…。

「彼氏…？！そつ……そんな素敵な存在つ……私には贅沢過ぎます……」

「一回は居た事あんだろ？？好きな男とか…。」

「一回も在りません…。好きな男性は…。」

入学式の時が初恋ですかね…／／／

「嘘でしょ？！入学式つて何時の？？幼稚園？小学校？」

「いえ。高校の入学式です。」

「へえ………。つてええええ…？?!」

高校の入学式で初恋つて…。

本気で言ってるのかよ…。

15年間何してたの…？？？

「あの……須藤君……可笑しいですか？」

急に俺に話振ってくんなよ……。 (汗)
祥弥と話してんなら祥弥に聞けつつの！！

「可笑し……… つつくはねえ??」

まっ……まあ俺も本気で好きになった女とかいねえし……。」

「そっそうなんですか……。」

西條君は……どうなんですか??」

「俺??俺は中2の時からD組の裕里菜って知ってる??」

「青木裕里菜さんですよね??」

あの人4月に廊下ですれ違って、

あんなカッコいい女性になりたいと思ってたんです!!

まさか西條君の彼女さんだったんですか!!」

「知ってる?!あいつああ見えて俺の前だと超ニャンニャンなの!!」

「ニャンニャン……… 甘えん坊って事ですか??」

今、どうやって答えに辿り着いたのか
頭ん中見てみてえ……。 (笑)

「そうそっ！！よく分ったな！！別人の様に違っからっ！！」（笑）

つか何で話がぶっ飛んで恋話になってんの？？

呼び出した意味合い無いんだけど…。

ありがとう

NO.2(後書き)

書くのが疲れてしまったので凄い短編です…(ORZ

でも次話ありますので楽しみにしていて下さい…。

璃來＝

ありがとう NO・3

「どーでもいいけどさあー、門限的な平気なわけ??」

「ああ…ウチ基本的には放任なんです。だから私が何時に帰ってきても干渉して来ないんです。」

「ふうん。で??どうすんの?」

「……………分らないです。あつ、でもこのままココに居座るのも迷惑だと思つので帰らして頂きます。」

使い慣れた敬語だなあ。

その敬語に似合わないのは
唯一の容姿だ。

人並みより少し短いスカートに
第2ボタンまで開けて、
腰には茶色のカーディガンを巻いて、
かなり明るい色の茶髪。

敬語とか似合つてない見た目。

中身は結構似合つてる気がするけど…。

まあ簡単に言えば、

GALが敬語使つてるパターン。

しかもGALのクセにどる率高過ぎ。

「帰るの??つーか家何処にあるの??俺デカイコンビにの目の前

」

「家は須藤くんの家の12軒先の所です。」

「近っ！……中学何処？？」

「T南中学校です。」

「そんなに近いならウチで飯喰っていかあ？……どうせ帰る時間気にしなくて平気なんだろ？？」

どうせ送る羽目になるなら飯を喰った後の方が俺にとっちゃあ都合が良くもある。

「そうだなッ！！俺も今日璃來の家で飯喰う約束してんの。コイツん家1人増えた位で怯まねえし（笑）」

「それは一里ある。（笑い）」

「それってどういう意味ですか？？」

コンコン…キィ…

「璃來兄ちゃ！ごあんらよー。リビングちてらってママが言ってたお。」

パタン…

「あれ妹。璃奈っつーの。
今はまだ2歳。」

「か…可愛いですッ!!」

「リビングの事をリビングって間違える所が可愛い」

「ははっ…どうでもいいけど下行こうぜ。今日はカレーだな。」

「ッしゃあゝ…!!」(笑)

大袈裟に喜ぶ祥弥に爆笑しながら3人で階段を降りてリビングに入った。

「母ちゃんただいま。
わりー1人増えた。」

「おかえり。1人位平気だけどさあ、帰って来てリビングに入ったんだったらただいま位言ってから引っ込めよ。さっさと座っちゃいな。」

「おう。」

「由里江さんおじゃまします。」

「祥弥じゃん。いらっしゃい。」

「あの…お母さんお邪魔してます。初めまして、木城優梨花と申し

「ます。今日は急にお食事を御一緒させて頂いて申し訳ございません。」

「あらッ！！礼儀正しい女の子だね！！見ての通り大人数だから1人位何ともないよ！璃來の隣が空いてるからそこに座っちゃってね。」

「はいッ！！！」

「璃來！！！！お前彼女出来たのかよ？」

璃勇（17） 高2。

「出来てねえよ。目撃女。」

「イヤイヤ！！！！意味わかんねえから！」

兄貴も目があったら殺されそうな位イカツイ男だ。おれに取っちゃ意気がるチワワ位怖くないんだけど・・・。

「璃來おかえりー。祥弥と誰ちゃん??」

「木城優梨花です。」

「優梨花ちゃんね。私璃華だよ。19歳で大学1年生やってんの（笑）」

「よろしくお願いします。（お辞儀）」

「可〜愛〜い〜（笑）」

「おい！え　ッとき　　　　　…　木城優梨花！ココ座れ。」

「あっはい！」

パタパタ走ってくる女は、俺の隣にちょこんと座った。

こんだけ人数が多いと椅子を使う訳にもいかず、食事は座卓だ。女は予想通り礼儀正しく正座していた。

「木城、取り敢えず名前教えておくわ。

木城の隣から璃奈（2）、璃音（1）、璃優（5）、

璃麻（7）、璃勇（17）、璃華（19）、璃羽（14）、

璃亜（15）、璃希（12）、おれの10人兄弟。

母ちゃんが42歳で親父が43歳。12人家族。多いだろ（笑）」

「多いですね。でも覚ええましたよ。

璃奈ちゃん、璃音くん、璃優ちゃん、璃勇さん、

璃華さん、璃羽ちゃん、璃亜ちゃん、璃希くん、

璃來く…じゃなくて須藤くん。ですよね。」

「すげーすげー！全部覚えてんじゃん！ヤベーなお前ッ！！」

「ちゅごいちゅごーいッ おねいちゃんにーこいーこしゅるの〜」

璃奈は、きつと俺が木城の頭をわしゃわしゃったから

木城に良い子良い子すると言ったのだろう。

須藤家では、頭をわしゃわしゃするのは、

「良くできました」の証だ。

俺も小さい時からそうだったから、

弟や妹を誉めるときはいつもそうする。

「おねいちゃん、璃來兄ちゃんはね、須藤じゃなくて璃來ってゆんだよ。」
だからね、璃來って呼ぶんだよ。」

用事特有の話し方で話している璃優は
人見知りしない方で、凄く楽しそうに話していた。

「璃優残念ながら、俺須藤っていうんだよねえ。
知ってた?? 璃優も須藤っていうんだよ。」

「うゝん…知ってた!!!」

えへへと笑う璃優は本当に可愛いと思う。
俺に好きな物は?と聞くと、
家族、金、喧嘩、友達で返ってくる。(笑)

「ママあゝ!!! りゅー今日璃來兄ちゃんのお膝でご飯食べるー!!!」

「いいよ。璃來の制服汚しちゃダメだからね。」

「わかったあー!!!」

スプーンとキティーちゃんのコップを持ってきて
俺の膝の上に滑り込んで来た。

「軽い軽い！お前もつと食べるよー。（笑）」

「璃來く優梨花ちゃんにまわしてやってくれる？？」

祥弥からカレーがまわってきて、

目の前にカレーが並んで、

「いたらきまちゅ」という

璃奈の声で皆が手を合わせて

「いただきます」を

言ってから食事が始まった。

「何かこうゆうの良いですね。」

「そうか?? 夏から冬まで暑苦しいぞ。」

「私4人家族で21の姉が居るんですけど、ちよつと事情があつて高校を卒業と同時に家を出て行ってしまったたつきり音信不通なんです。母と父とも時間が会わなくて食事はいつも1人なんです。だから大人数で食事をするのは何年前の話つて感じて...。」

結構シビアな道歩いてんだな。

放任されてるのも

実は嬉しくないんじゃないかな。

ねえのかな。

俺は放任つてのも

良いなとは思うんだけど。

つて感じでちよつと

心配もしてみたんだけど...

「まあ気が楽だから良いんですけどね。」

と心配ない様な返事をしてきた。

自分で言うのも何だけど、

男とはとても単純な生き物である。

女はもつと複雑なんだろうけど、

男は単純な思考回路と

複雑な思考回路の2つを持つ。

そして、木城の話を聞いて

少し複雑な思考回路に繋がった。

だけど、今の一言で、

単純な思考回路に繋がった。

「ふん。なら良いんじゃない？」

「オーイオーイ。何2人でお話してんすかあ？？」

「あゝ??? まあ色々だ色々。」

「んにそれッ!! 超寂しいわ!!」

賑かな食事も終わり、祥弥はバイトで先に帰ると言って徒歩2分もしない所を自転車で帰り、木城が帰ると言って、俺が「気を付けろよ」と言つと、姉貴に「送ってやれよ」と頭を蹴飛ばされた。

「オイ…送るから。家どっち??」

「玄関を出て左です。でも12軒先の距離だけですよ??」

「つべこべ言ってんじゃねえよ！送るから…！早く行くぞ…！」

「あ…はい……………」

家を出た瞬間に沈黙の闇に包まれた。
その沈黙を破ったのは木城だった。

「須藤くんの家がこんなに近いと思いませんでした。」

「俺も思ってたなかった。」

そしてまた沈黙に戻った。

「何で俺らの喧嘩見てたのか知りたいんだけど。」

「それは言えないです……………」

「よねえ……………」

「すいません……………」

「謝んなくて良いよ。まあこっちも深く問い詰めたりしない様にするし。」

「はい……………」

この道結構暗いし、
意外と相当な距離がある。
1人で帰らせてたら
変な奴に絡まれてた
かもしれねえな。

「送つという良かったな。」

「えッ…？」

「ああ、こつちの話。」

10分程歩いたとき、
俺は木城の足取りが重く、
歩く速度も遅くなつて
いくのに気付いた。
何故気付いたのかというと、
俺は歩くのが早い方だからだ。

7、8分前迄は隣を歩いて
居たのにドンドン後ろの方に
下がって行くのが横目に入って、
後ろを振り返った。

「どうした??飯の食い過ぎか??」

「いえ……平気です……。」

ドンドン後ろに下がっていく。
ドンドン顔が下を向いていく。

「あつ、家ココです。」

全体的に白で、当たり前だが
俺の家よりは小さい。

初めて見たハズなのに、
何処か懐かしみのある家だ。

「お前本気で平気か？顔が青白いぞ？」

「私の部屋が2階に有るんですけど、
部屋の前まで付いて来て貰っても
良いですか？」

「あ？ああ……まあ良いけど。」

木城は家の鍵を開けると、
少し速歩きして階段を昇って行く。

俺も仕方なく木城の後に付いて行った。

階段を昇ると、

廊下の右奥の部屋の前に立ち、

「ありがとうございます」と言っ
て部屋の中に入っていた。

俺は何か微妙だな、と思いながら
階段を降りていった。

階段を降りている途中に

皿の様な食器が割れる音がした。

木城の親がコップでも

落としたのかとも思った。

だけどその後には怒鳴り声が聞こえた。

「あなた本当に馬鹿なんじゃないの?!」

「お前に言われたくないな!! 第一子供の気持ちも分かってやれないのか! こんだから優梨奈が家を出て行くんだ!!」

「何なのよ!! あなたは仕事やってれば良いけどこっちは子供の面倒と家事もやって地区の仕事もやらなくちゃいけないのよ!!! あなたよりも大変なのよ!!!」

「お前の放任の仕方と世間一般の放任の仕方とじゃ丸つきり違うだろ!! お前には子供への愛情がないのか?! あ?!?! 優梨花に冷めた飯を喰わせるのが放任って言うのか?!?! そう言うのを育児放棄つつんだよ!!」

夫婦喧嘩??

初めて見た。

俺の親と変わらない位の年齢だと思う。

まさか毎日こんな事やってんのか?

それを知って「ただいま」と声を掛けなかったのか？

関係無いけど父親の方すげー元ヤンみてえな顔してるなあ。

つかここのら辺元ヤンの親が多いのかな（汗

取り敢えず出た方が良いな。

見つかったら不法侵入だと思われるだろ。

俺は靴を履いて玄関を出た。

玄関を出た時、ポケットでケータイがバイブで震えてるのに気付いた。

メールかと思ったら電話で、
相手は祥弥だった。

『もしもし？？祥弥だけどさあ、どうよ木城優梨花ちゃん』

「どうって普通じゃね？？今送って来た帰りだけど特に…」

『送ってやったんだ。何？』

「一目惚れとか無いの？」

「ねえよ。可愛いとは思っけど同じクラスで隣の席なのに気付かない位だし。」

『それは俺らがクラスに興味が無いからだよ。（笑』

「それも有るけど。」

『とか言ってその内あの子の事好きになると思っよう??? 璃來が。』

「あそ。それはお疲れ。」

『意味分かんねえからッ!! (笑
ったく俺が休憩時間に電話してやってんのによろ。』

そんなの俺の知ったこっちゃねえよ。

バイトの休憩時間に電話して来る位ならその休憩時間の分まで働け
馬鹿野郎が。

……………とは言わず、

「知るかボケ。」

と適当に流して終わった。

この時点で好きになる要素は
顔だけだった。

だからと言って好きではなかった。
てゆうか好きになれないと思った。
俺らの喧嘩を見られた張本人でもあるし、そもそも俺現時点で女に
困ってないし。

『まあでもあの子の事好きっつー男は居るよなあ。確実に。』

まあ……。『

それは顔とあの性格からしたら……

「居るんじゃないの??」

『……お前いつから女に興味無くなった?』

「あ??あ 初めからじゃね??」

男にも興味ねえけどな。」

『あつたら困んだけど……(笑)』

知ってるつの。

まあでも……

「お前の事は親友として頼れる唯一のダチだと思ってるからさ。」

『あーらあらあら!!嬉しい事言ってくれるじゃん(照)』

「俺ら結構知り合いダチとか居るけど最終的には祥弥だし(笑)」

ちよつと良く言い過ぎたかな。

まあでもこれが本音って事で。
心地良く受け取ってくれ（笑

『俺もだわ。多分生涯のダチとしてたよりにしてるよ。』

段々恥ずかしくなってきた。

「さんきゅ。……祥弥バイトは？？」

『あーあと5分だわ。急にTELして悪かったな。』

「全然。バイト頑張れよ。じゃあな。」

『おうッ！』

プーップーップーッ……

電話が終わった時俺は玄関に入っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4432m/>

ありがとう

2010年10月10日02時29分発行